

# 平生夙三郎と日本社会の経済倫理

——第一次世界大戦と日本の対応——

(1)

藤 本 建 夫

## 1. はじめに

近現代史の世界を眺めると、恐らく第一次大戦から第二次大戦までの約30年間ほどさまざまな政治的・経済的・社会的動乱に世界が翻弄され、思想までも含めた大構造転換を経験した時代はない。この所謂戦間期の渦中にいた人々は、平和な社会で生活を送っている者には想像できないような苛烈な現実をまえに、それぞれにその大渦に弄ばれてゆく。信じていたものが信じられなくなる、戦間期はそういう時代であった。そしてまたそういう時代であったからこそ新たな時代のためのヴィジョン、新機軸もまた打ち出されてくる。

平生夙三郎はこの戦間期の30年間、克明に日記を書き綴っている。平生夙三郎日記は大正2（1913）年10月7日から始まり、第二次大戦後の1945年10月24日まで、死（11月27日）の一ヶ月前まで続く。この間の平生夙三郎の経歴を見ると、1925年に、1894年以来勤めた東京海上（1918年から東京海上火災）保険会社（1917年から専務取締役）を退職した後、甲南学園理事長、甲南病院理事長、川崎造船社長となり、1936年には広田弘毅内閣で文部大臣を務め、翌年大臣を辞任した後日本製鉄社長、大日本産業報国会会長、鉄鋼統制会会長と、一貫して日本経済の表舞台にいた。彼は1942年11月に脳血栓で

倒れるが、奇跡的に回復し、1943年には枢密顧問官に親任される。

平生は本来自由に思考し、合理的に行動する主義をモットーとした実業界のリーダーであったが、戦時体制下では日本の政治・経済の重責を担う。それがなぜ可能でありえたのか。この問題を平生鈺三郎の日記を通して明らかにすることを本稿のテーマにしたい。

平生の日記には家族内でのこまごまとした事柄や書生たちとの処世訓的やり取り、教育観、東京海上保険の神戸・大阪支店長としての経営判断、社会の出来事、日本の政治に対する批判、世界情勢への関心など、彼の気を引くありとあらゆる事柄が詳細に記されていて興味は尽きないのだが、ここでは平生鈺三郎という個性に映った日本社会とその経済倫理という視角から時代の相を切り取って見たい。その格好の材料は彼が日記を付け出してからすぐに提供される。それはシーメンス事件<sup>(1)</sup>であった。ここから議論を始めたい。

## 2. 日本社会の腐敗の構造とシーメンス事件

1912年7月29日に明治天皇が崩御し、大葬の儀は9月13日に行なわれた。周知のようにこの日に乃木希典が妻とともに殉死し、明治という時代がこうして終わる。大正初期の政界を見ると、明治維新以来の藩閥体制と政党政治とが拮抗し、それが日本の政治を不安定にさせていた。藩閥体制に関しては陸軍の長州と海軍の薩摩が覇権を競い、政党としては立憲政友会が中心的な地位を占めていたが、選挙制度をはじめとして、基本的に未熟であった。こうしたなかで、1912年12月5日に第二次西園寺公望内閣が成立する。この内閣のとき陸軍から朝鮮に駐留するための二個師団増設要求<sup>(2)</sup>が出されたが、同

---

(1) 平生はここでシーメンスと呼んでいるが、ドイツ語ではジーメンス (Siemens) である。日本史でも通常シーメンスと表記しているので、本稿でもそれにしたがった。

(2) 陸軍はなぜ二個師団増設を主張したのか。由井正臣は当時軍事課長であった宇垣一成の意見を紹介している。それによると、中国では辛亥革命 (1911-12年) に

内閣は財政上の理由（国力を超える日清・日露戦争以後の軍備増強が財政を圧迫）からこれを拒否した。これに反発した陸軍は大臣を引き上げ、後継大臣を出さなかったために（軍部大臣現役武官制）内閣は総辞職した。後継内閣として第三次桂太郎（長州）内閣が成立したが、増師反対の声は大きく、「閥族打破・憲政擁護」＝藩閥批判が国民的運動となり、1913年2月10日には日比谷公園は憲政擁護を支持する人々で埋め尽くされ（第一次護憲運動）、交番、桂内閣寄りの新聞社などが焼き討ちにあった。日清・日露戦争以降の国家の経済力をを超える軍備拡張は当然国民の重い負担となり、増税となって現れたが、国民はこれ以上の増税に耐えられなくなっていたのである。

桂内閣にはこの国民の圧力を押し返す力はなく、1913年2月20日、ついに総辞職を余儀なくされ、その後継首相には薩摩派の海軍大将山本権兵衛になった。彼は内閣の基盤を強くするためには民衆の声を無視する藩閥政治を緩和してゆかなければならないと考え、立憲政友会と手を結んだ。しかし相変わらず国民の長薩藩閥体制批判は続き、軍備拡張予算のための財源としての織物消費税、営業税、通行税などの増徴<sup>(3)</sup>に対して廃税を求める声も大きくな

---

よって清朝が倒れ共和制の方向に向かい始めたが、一方で伝統的にロシアを仮想敵国視していた日本の陸軍は、辛亥革命以後、ロシアの積極的な満蒙進出を恐れていて、他方で中国への植民地侵略にあたって日本が軍事力強化によって「主動的地位」に立とうとしていた。しかし軍備増強は財政膨張を招き、租税負担は今以上に大きくなるとの理由でジャーナリズムは二個師団増設に反対し、西園寺内閣も反対の態度を固めていた（由井正臣『軍部と民衆統合——日清戦争から満州事変期まで——』岩波書店、2009年、第2章を参照）。

- (3) 日露戦争以後国民の間では国債費の重圧（1906年から13年までの平均で一般会計歳出の約28%）のもとで「財政整理」を求める声が大きくなり、これを受けて1906年には大蔵省税法審査委員会（会長は大蔵次官の若槻礼次郎）が設置され、その委員会で「租税整理案」三案が出される。そのうちの一案に、「地租、所得税、営業税、織物消費税、通行税及塩専売ヲ廃止シ代フルニ不動産税ヲ以テス」とある。ちなみに、1904年には非常特別税法（ここには織物消費税、地租・営業税等広範にわたる税目で増徴）、翌年にはさらに相続税法が導入され、非常特別税法の改正で通行税が創設され、1904年に増税された税目でさらに増徴が行われた（金澤史男「両税移譲論展開過程の研究——1920年代における経済政策の特質——」『社会科学

り、それらが憲政擁護運動として結集し、その矛先は内閣に向かった。そこに海軍贈収賄問題が発覚するのである。

この軍部・政界を巻き込んだ大事件は、1914年1月21日、外電が伝え、23日には島田三郎（立憲同志会）によって衆議院予算委員会で暴露された。ドイツの電気会社シーメンスの日本支社が電気器具の売り込みで海軍上層部に賄賂を贈っていた事実がこうして明らかとなった。シーメンス社と海軍上層部との贈収賄事件は、2月中旬あたりから巡洋艦金剛をめぐるイギリス・ヴィッカーズ社との疑獄事件へと発展し、山本内閣は総辞職を余儀なくされる。

このニュースを耳にするや、平生は早速次のように日記に記す（1914年1月23日）。

「本日のロイター電報に、シーメンス・シュッケルト会社東京支社のタイピストが重要書類を窃取し、本国に帰り、同社が日本の高等武官に贈賄せし事の事実を知れることを本社に述べ、脅喝して貳万金を得んと試みたるに、本社は之を告訴せるを以て、同タイピストは捕拿せられ、裁判の結果同人は二年の禁固に処せられたり。其判決の際、判事は同人の罪状審査の結果、シーメンス会社が日本の高等武官に贈賄せし事実を確認せしを以て、情状を酌量せしことを陳べたり。

嗚呼、帝国軍人は其清廉潔白の点に於て世界に冠たりと自負せし事は昔の夢にして、今や武臣、錢を吝み外国会社より収賄して赤恥を外国法庭に曝すに至る。其当事者は何の面目あって国民に見へん、唯一死あるのみ。現首相は軍艦の注文に対し秘密口錢を得て今日の富を為せりとは、世人の怪むところなり。果して然らば、我国軍人の腐敗は膏膏に入れるものか。タイムスの、所謂大正は昂上の時代にあらずして凋落の時代にあらざるか。頼むべきは青年なり。汚れざる壯者ならずや」（原文はカ

---

研究』36-1、1984年7月、70、75-75ページ）。

タカナ混じり文だが、カタカナはひらがなに変えた)。

平生は日清、日露両戦役で勝利した日本の軍隊を心から誇らしく思っていただけに、言いようのない幻滅を味わう。「清廉潔白」において「世界に冠たる」帝国海軍軍人が収賄に手を染めるとは、「腐敗は膏肓」にまで達していると言わざるを得ず、「何の面目あって国民に見えん」。一体何ゆえにこうした腐敗が生じるにいたったのか。

翌1月24日の日記には次のような記述が見られる。この贈収賄事件の発端は、シーメンス社の東京・ロンドン両支店間の往復文書によれば、同社は「日本海軍軍人と予め手数料を確定して売込」をしていたが、当時在英監督官であった井出謙治中佐が同社に注文していた「電機具の価額不当」を唱え、ついに値引きを承諾させたことにあった。事件はこうして始まるのだが、平生はここから次のような推論をする。

「如何にシーメンスが口銭（秘密）を利用して海軍内部に入込み居りしか想像するに余あり。而して其主たる手数料の取込者は、目下艦政本部第四部長藤井光五郎なり。……彼は資性恬淡なるが如き人なりしも、物質的文明に幻惑せられ華美驕奢に流れたる末、如此きさもしき根性となりしか、又製造家の甘言に惑わされしか。事実とせば痛嘆の至りなり」。

「清廉潔白」のはずの帝国軍人が「銭を吝み」、「製造家の甘言」に惑わされたのは「物質的文明に幻惑せられ華美驕奢に流れたる末」だと平生は断言するのだが、その後の日記でもこの言辞が繰り返し出てくる。2月4日の日記によると、西欧文明は技術的には大いに進歩しているが、「外人は物質的慾望に幻惑させられて道義の觀念を喪失」している。またその文明は「人類を駆て獣慾の奴隷」にしてしまう危険性を孕んでいる。日本は、開国してまだ日が浅く、物質文明では西洋文明に劣っているが、「精神的に墮落」しなければ、日本は年と共に彼の勢力を凌駕」することができるはずである。しかし「生命すら国家の為め犠牲にせざる可からざる軍人が金銭のため外人に

買取せられたる如き事件を生じたることは長大息」の極みである。

要するに平生はシーメンス事件の中に西欧に対する日本、物質文明に対する精神性を見、日本が西欧の物質文明に取り込まれていくことに危機の本質を感得したのであろう。

さて、ここで海軍高官を取り込もうとしていたシーメンス社に目を転じると、電機市場において日本に事業展開していた同社は、日本市場ではアメリカ企業のはるか後塵を拝していた。シーメンスに比べアメリカ企業が日本で優位に立つことができたのは、第一に発注から製品引渡しまでの期間が短く、かつ納入期日に遅れが生ずることがなく、第二に日本の電機技術がアメリカの影響下で出発したので、アメリカの技術が「事実上の標準」になっていたこと、第三にアメリカ企業は日本側のパートナーの活用（例えば三井物産など）に長じていたことなどにあった。

こうしたアメリカ企業に対抗し、日本でシェアを拡大しようとすれば、価格競争に持ち込む以外にはなかった。ここでは利益は二の次になる。しかし価格競争のみでは目的は達成されない。賄賂まがいの手数料工作の手が必要になる。この流れのなかでシーメンス事件が発生するのである。<sup>(4)</sup>

さて、シーメンス事件において西欧物質文明はヴィクトール・ヘルマンに代表される。彼の住居は兵庫県武庫郡住吉町にあった。シーメンス・シュッケルト社東京支店の取締役であった彼が神戸に居を構えていたのは少し奇異に感じるが、当時シーメンス社は東アジア市場の中心に日本を据え、神戸工場で製造された製品が東アジア各地に配送されていたことを考えれば、納得がいく。<sup>(5)</sup> 平生が描くヘルマンは日本をはるかに凌駕する西欧物質文明そのものようである。「西本願寺法主光瑞氏が建設せる二楽荘の下に在る山上に、

---

(4) 竹中亨「シーメンス社の対日事業」工藤章・田嶋信雄編『日独関係史 1890-1945』第一巻、東京大学出版会、2008年、232-238ページ。

(5) 同上、232ページ。

宏壮にして輪奐の美を極めたる高廈に棲み、豪華を極め、常に自動車を駆りて揚々として他を睥睨するの概あり」(2月4日)。小高い丘の上にヨーロッパ中世風の邸宅に住み、自動車を疾駆する光景はまさに「他を睥睨する」と平生には映ったのであろう。その彼が1914年4月25日に収監されたのである。そして同年7月14日に、海軍当局者への贈賄の罪で懲役1年、執行猶予3年の判決が下された。<sup>(6)</sup>

ちなみにこのヘルマン邸の上に二楽荘があったのだが、これは西本願寺法主大谷光瑞が1908年に、1902年から4年にかけて行なわれた西域探検(第一次大谷探検隊)で収集した宝物を公開展示するために建設された建物であった。ヘルマン邸が物質文明を代表していたとすれば、日本の精神性を代表していたのは、平生夙三郎が見るところでは、帝国軍隊と並んで宗教であり、そして日本の宗教界を代表していたのが本願寺であった。しかしその西本願寺が当時財政的に行き詰まっていた。平生は、大谷光瑞は宗門の長たることを忘れた「似非豪傑」だとして次のように痛烈に非難する。二楽荘は、

「今や一人五拾銭を徴して之を公開す。観覧者には二楽煎餅を供し、新疆発掘物を陳列せる館内を見物せしむ。……恰も興業人の如し。彼は一代の豪僧として一時名を海内に喧伝せしも、其行たる全く高僧聖徒にあらずして、唯名を銜い奇を弄ぶの似非豪傑なるに似たり。今や寺の財政困難にして祖先伝来の宝物什器を競売して恬として耻じず」(1913年10月31日)。

帝国軍人を贈賄したヘルマンが収監され有罪判決を受け、大谷光瑞は財政破綻などで1914年に門主の地位を去り、二楽荘は1932年に焼失する。ヘルマン邸および二楽荘はそれぞれこの時代の日本の荒んだ時代精神を象徴していたと平生夙三郎は考えていたのであろう。

---

(6) <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/ContentViewServlet?>

帝国軍人が物質的欲望に翻弄され、宗教界も以上のような状況で、まさしく日本の精神性が揺らいでいたなかで、政治の世界はこの贈収賄事件に対して毅然とした態度をとることができたであろうか。

シーメンス事件について山本権兵衛政友会内閣はどのような行動をしたのか。平生は、政府はすぐにも査問委員会を設置して「速やかに真相を查明」（1914年2月3日）することを要求する。なぜなら、平生の脳裏には1年前の第三次桂太郎内閣が総辞職するきっかけとなった日比谷騒擾事件があり、また秋には大正天皇の即位の大礼が控えていたからである。しかし政府の対応は鈍く、また野党の立憲国民党の犬養毅の政府不信任弾劾演説にしても迫力が無い。平生の考えでは、政党間の対立以前に、この問題は「海軍収賄の元凶たる山本総理に対し、其事実を公示して弾劾上奏を為し、以て其任にあらざる事を指摘」することが当然のことである。しかしそれを速やかに行わないために、民衆が不穏の動きを見せ始めている（2月10日）。

そうこうしているうちに、海軍の収賄問題は範囲を拡大し、戦艦金剛受注<sup>(7)</sup>がらみで、内閣を揺がす大疑獄事件へと発展する。平生は2月18日の日記で次のように慨嘆する。

「武士道を叫んで海軍将校の冤罪を議場に豪語せし山本首相の所感如何。……松本氏（呉鎮守府長官……藤本）は日清戦争当時、宇品運輸部長として其辣腕を以て鳴りし人、村上格一氏（呉鎮守府工廠長……藤本）は日露戦争の初期、千代田艦長として露艦の罅を衝て仁川を脱出して瓜生司令官をして砲火を開かしめたるの勇士なり。共に両戦役に於て勲功赫々、

---

(7) 日露戦争後、海軍では海軍大拡張計画が立てられたが、時代は「大艦巨砲主義」時代に入っていて、日本も下級戦艦建造を早急に考えなければならなくなる。そこで日本はイギリスから最新鋭の技術導入を含めて、1910年11月にヴィッカーズ社に巡洋艦金剛建造を発注する。贈収賄事件はこの受注をめぐる展開する（奈倉文二・横井勝彦・小野塚知二『日英兵器産業とシーメンス事件——武器移転の国際経済史——』日本経済評論社、2003年、第4章）。

世人をして其偉績を敬慕せしめたるの将校なるに、軍人銭を愛するの結果、この醜態を暴露し……、憤慨の至なり」（2月18日）。

こうなれば新聞報道も過激となる。2月20日の日記には、「近時、新聞紙の報ずる記事は海軍収賄事件にあらざれば、西本願寺財政紊乱問題のみ」（2月20日）。法主及び以下の僧侶が「宗教家たるの天職」を全うすることを忘れ、「海軍軍人にして自己の責務を全うするの精神」を蔑ろにしているからである。しかしいわばスキャンダルを暴露して盛んに報道を繰り返す新聞にいらだつ政府は弾圧に走る。内閣を批判した大阪日報は発売禁止となった。しかしそうすると新聞は一層激越となる。平生はこうした新聞弾圧策はかえって政府にとってマイナスの効果しか生まないと批判する。発売禁止は「寧ろ彼をして名をなさしめ、其賂路を拡張せしむるに均し」。そうだとすれば「害毒流布の範囲を拡張するものにあらずや」（3月2日）。

政府は窮して内閣改造を行い、海軍収賄問題をうやむやにしようとし、さらには予算がらみで陸軍には第二次西園寺内閣が倒れるきっかけとなった増師を約束し、海軍には「廓清」を誓約させることで問題を解決しようと図ったが、貴族院で予算案が否決され（3月10日）、結局、山本内閣は総辞職した。3月25日の日記によれば、

「山本内閣は予算不成立に依りて、施政不可能を理由として辞表を捧呈せるものの如し。……貴族院が海軍廓清を主張し、……海軍費を削減し予算を不成立ならしめたる以上、山本首相は一日も其職に在るを許さず、山本首相と共に内閣総辞職を為すは理の然らしむるところなり」。

軍艦金剛受注収賄問題は更に三井物産関係者にまで累が及んでいった。これについて平生は次のような感想を記している。

「彼等は三井の重役として実業社会に絶大の勢力を有し、群小実業家をして其前に跪座せしむるの權威を有し、青年をして其成功を羨望せしめ、其成功談は実業学校の学生をして耽読せしめたるものなるに、たと

え会社の為め献身的行為とはいえ、国民として唾棄すべき陋劣なる手段を以て会社の利益を計りたるものにして、士人としては与に席を共にするを耻ずるの行為を為したるものなり。

……畢竟自己の利益の為に自己の人格を傷くるも敢て辞せざる醜漢と指弾さるるも、抗弁の辞なかる可し」（4月25日）。

平生は、商人までもがこうした「悪風」に染まっていることは「現今の官吏社会」において「上下を通じて賄賂請託の風瀾漫」していて、この手段に依らなければ事業を営めなくなっているからなのだが（4月25日）、三井物産ほどの企業であれば、「羹に懲りて膾を吹くの愚を為さず、誠心誠意政府の注文を可成低価に履行し、若し賄賂の為め不正を行う官公吏あらば之を摘発し以て今回失うたる名誉を回復」すべきだとエールを送る。

さて海軍収賄事件のその後をみると、首謀者の松本鎮守府長官は三年の刑を言い渡され（5月30日）、7月2日の日記にはさらに日本の軍隊の恥ずべき事件の結末が記されている。海軍の山内万寿治中将（呉鎮守府長官などを歴任して日本製鋼所会長）は急病のため咯血したと報じられたが、実は彼は自殺を計っていた。それは果たされなかったが、その原因は、彼が戦艦金剛建造にからみ多額のコミッションをヴィッカーズ社から受け取っていて、そのために裁判所の糾問を受けるのではないかということに恐れて割腹し、気管を切断しようとしたのであった。平生は次のように書く。

「海軍収賄問題は已に満了し、他にかかる醜件に干与したるものなしと海相の言明せしに拘はらず、山内中将が自殺を以てこの事件を隠蔽せんと試みたりとせば、海軍廓清は決して完了したるものにあらず。帝国海軍の耻辱、之より甚だしきはなし」（7月2日）。

こうして海軍の「廓清」がなされぬまま、そして「廃税」論議もそっこのけで日本は第一次大戦を向かえるのである。

### 3. 第一次大戦と日本の政治経済構造のゆがみ

#### (1) 第一次大戦の勃発と戦時保険補償法

山内中将の自殺未遂事件の数日前、6月28日に世界を驚愕させる事件が発生した。6月29日の日記に平生は次のようにこの事件を書き留めている。

「号外あり。奥国皇太子フロジナンド（フェルディナント……藤本）大公及皇妃はボスニア州の某所を巡遊中、一学生のため狙撃せられ薨ぜられると。ボスニア、ヘルツェゴヴィアの二州は……多年奥国の保護国となり、昨年バルカンの叛乱前、奥国が公然奥国の一州として併合せしものにして、この併合に関しては、皇儲が独皇と協商して大に尽力せられたることは人の知るところなり。……皇儲の薨去は三国同盟に影響するところなきか。カイゼルはフロジナンド大公の指導者として、三国同盟の盟主として大に其勢力を拡張し、以て三国協商を打破せんと試みたるに、奥国が有力なる皇儲を失ひ、皇帝は85歳の高齢に在りとせば、決して影響なしと言ふべからざるなり」。

平生はこのサラエボ事件を知るや、本能的に三国同盟と三国協商の間に極めて重大な結果をもたらすのではないかと危惧したことが読み取れる。この危惧は現実となる。オーストリアとセルビアとの交渉が不調に終わると、まずロシアが「スラブ人応援の為め動員」（7月31日）、翌8月1日の日記には「独国は露国の動員を以て奥独に対する戦備」と見なし、動員を12時間以内に中止しなければ、「宣戦すべしと通告す。事局益切迫、戦機正さに動かん」と記す。

戦争の勃発は直ちに東京海上にも影響を及ぼす。8月4日の平生の日記には次のように書かれている。「1日以来ウオア・リスク問題突発し多忙。外国貿易に従事する人は、銀行が為替取組の謝絶とウオア・リスク契約の強求とにより忙殺せらる」。翌日の日記にも「ウオア・リスクの為め接客と電話

とに忙殺せられ、寸時なし」とある。このウオー・リスク、戦時保険については鈴木商店の金子直吉が興味深い証言をしている。サラエボ事件の後、1914年7月24日か25日、神戸から欧州に向けて出帆した平野丸に鈴木商店も樟腦その他を積んでいたが、上海を過ぎたころ横浜正金銀行から呼び出しがあり、「平野丸に積んだ貨物には戦時保険をつけなければビル（船荷証券）を組む訳には行かぬ」と言われ、早速東京海上に行って相談をすると、戦時保険の料率は保険金の一割というので、結局正金銀行と話し合っただでシンガポールで陸揚げした。さらに金子直吉によれば、この平野丸の事件の後思うように輸出ができなくなった。「神戸の埠頭には輸出品が山積しているが、それを積出すことが出来ない。僅かの間に商売は火の消えたようになってしまった」。兵庫県知事からの相談もあり、金子は政府に援助を求めて上京し、やがてそれが戦時海上保険補償法となった。これによって保険会社は損失の場合保険金の8割が政府から補償されることになった。<sup>(8)</sup>

平生日記を見ると、開戦と同時に盛んに戦時保険の話題が出てくるが、8月22日には戦時海上保険補償法案が政府筋で話し合っているようだと伝えている。「戦争保険の高率は外国貿易を阻害すとの議論朝野の間に喧しく、殊に政治の中心たる東京に於る商業会議所に於ては、貿易に関係なき連中が囂々之を唱えて政府に上申」している。「人気取政策を専一」とする大隈内閣は直ちに之を入れて「戦時保険官営の案」をつくり、22日に枢密院に諮ったと聞く。しかし平生はこの案に疑念を感じた。というのは、戦時保険の高率が問題とされているが、開戦後は貿易は「為替不能」のため阻止されているのであって、「war risk 率」によるものは僅少に過ぎない。「海軍省若しくは逓信省が敵艦の動静を偵知して、之を航海業者に内報」すれば、何の危険もなく、保険料率も低率になるはずである。要は「海軍省及逓信省は決して之を

---

(8) 大阪朝日新聞経済部編『昭和金融恐慌秘話』銀行問題研究会、1927年（初版）、朝日新聞社、1999年（朝日文庫）43-44ページ。

公示若しくは内報せず、従て貿易業者をして不安を感じしめたる」だけの話である。

8月24日にもう一度この問題を論じている。戦時保険補償に関する政府案は、戦時リスクが高いが故に貿易が阻害されているとの理由から制定されようとしているとすれば、「政府は本末を誤りたるにあらざるか」。貿易は「為替不能」によるものである。このリスク率は戦争当初にはなるほど見られたが、すぐに低下しているのを見ても、

「官営の如き計画を為すの価値あるものにあらずと考ふ。然れども、政府がウオア・リスクを補償するとせば、夫丈け貿易商は一種の保護を受けるものなれば、貿易業者に取りて悦ぶべきことなるも、為替上の便宜を与ふることにあざれば何等の効果あらざるべし。其方法に至りては未だ発表を見ざれば、批評の限りにあらず」。

要するに、平生は戦時の貿易問題は為替の取組を銀行がするかどうかであり、リスク率の高低は当該商品の需給関係と並んで、正確な情報如何によるところが大きい。したがって後者の問題は政府がどれだけ貿易業者に満足できる情報を与えるかどうかにかかっている、その観点からすれば、政府保険補償制度の効果ははなはだ怪しいものである、と評価した。政府も確信が持てなかったのか、9月はじめに数回平生のもとに農商務省技師を送って政府法案についての彼の意見を求めている（例えば、9月2日）。平生の見どころ、法案に対する世論の評判は芳しいものではなかったが、8割補償を骨子とする戦時保険補償法案は国会を通過し9月14日に公布された。これに関する施行細則および料率表も同時に告示されたが、特に料率については当事者間の競争に任せるべきであるのに、平生によれば、「何等海上の経験、智識なき官吏が会議を以て貿易業者、船舶業者、及保険業者にも満足」を与えようとしたために、料率表は全くの「支離滅裂」で各方面から非難の声が上がっている。「政府が人気取の目的を以て制定」した結果がこれである。

平生はこのように補償法を厳しく批判はするが、後述のように、彼の東京海上はこれをうまく利用しながら、火災保険の兼営などとともに利益を上げ、まさしく1914年末の忘年会では「旭日昇天の勢」であるとスピーチしている。

経済界では以上のように戦時保険補償法案が審議されている間、軍事面では青嶋をめぐって政府および連合艦隊の動向に誰もが注目していた。8月11日の日記によれば、新聞では「東洋平和を破るべき禍源たる独国軍艦は武装を解き、青嶋の守備を撤去すべきことを注的に要求し、その要求を支持し且聴かずんば、武力を以て其要求を遂行することに決したる」ようであった。平生はこの新聞報道に対して、「人道の為め青嶋に於る独逸軍は防備を撤して開城せんことを希望す」と反応している。政府は8月15日にドイツに最後通牒を發したが、その内容は、号外によれば、1. ドイツ艦艇の東洋からの撤退、2. 「膠州湾の租借地全部を支那に引渡す目的を以て、9月15日迄に防備を撤去して無条件、無償を以て日本官憲に引渡すべし」、3. 8月23日までに回答がなければ、「日本は任意の処置を取るべし」というものであった。この勧告について、「恰も日清戦争後に於ける三国干渉の報復的干渉として興味を以て迎へられ」た（8月17日）と記している。この勧告に従って8月23日に日本はドイツと戦争状態に入った。

## （2） 船成金の登場と経済バブルの発生

日本政府の外交政策と深く関わる青嶋攻略とそれ以後の日支関係は後論に譲るとして、ここではまず国内の経済状況について平生はどのように見ていたのかを検討しておきたい。国民の一部が株と船に酔い痴れ、経済がバブル化していく様子を平生は見事に活写している。

第一次世界大戦の日本経済・社会を象徴しているのは船成金である。彼らの中で、日記にももちろん登場するが、内田信也、勝田銀次郎、山下亀三郎らが良く知られている。ではどのような背景の中から彼らは登場したのだから

うか。日記からその背景を探ってみたい。

1915年3月14日の日記。

「二十一カ条の要求」をめぐる日支交渉事件は遂に予想の通り二師団に達する兵を南満、北清、山東に分遣することとなり、「遽に御用船借上」となり、運賃は急騰し、門司浜石炭運賃は1円70銭という「前古未曾有の高率」となった。昨年暮れには55銭まで下落していたから、一気に三倍以上となり、これは「寧ろ一種の恐慌」状態である。船舶需要が大きく膨らむ兆候が見え始めるが、これは経済的に危険な状態だと平生の目には映った。

さらに1915年4月12日の日記。

日支交渉に対して欧米諸列国ともこの談判に容喙することはなさそうなので、交渉は日本の主張が貫徹する可能性が強く、またこの大戦が今後も続くようであれば、日本の軍需品輸出、ドイツ・オーストリアの代用品輸出、運賃収入など景気回復を示す指標が次々現れていて、株式市場では「大いに人気を刺激し買気を激成」しているらしく、「この勢にして止まざれば、或は成金相庭を顕出するやもしれず」。通常取引所は産業界よりは「はるかに刺激を受け易い」、「取引所は第一級の先見的景気」である<sup>(9)</sup>、とW.レプケは『景気変動』の中で述べているが、「成金相庭」を醸成しかねないほどの勢いで株が買われていた。それは何よりも不景気による金融緩慢という要因が大きかった。前代未聞の低金利であれば、株式市場では良い材料が認められれば、そこに資金が殺到する。

明くる13日には、

「株式市場は連勝の余勢を以て益買募れる。買方の猛威は売方を屏息せしめんとするの傾向にて、電鉄、軽鉄株を除きては諸株昂騰し、殊に主力株と称せらるる大阪取引所株、堂嶋米取引所株は大飛躍を為し、終に

---

(9) 藤本建夫『ドイツ自由主義経済学の生誕——レプケと第三の道——』ミネルヴァ書房、2008年、61ページ。

午後立会休止を見るに至れり。……従て関係者の利益は莫大なりといえども、一般には好景気というべからざるも、金融の緩慢は大いに株式に対する買気を助長せしめたるならん。

平生の目からすれば、この頃の日本経済はまだ景気はさほど良いとは言えなかった。大戦直前の1914年5月23日の日記には「諸物価は未だ低下の勢を減ぜず。世は悲観の聲に満たされて各人憂悶の色を帯べり」と記されていたが、1915年4月時点でも実体経済は悪く、金融は相変わらず緩んだ状態であった。そこで行き場のない資金は株などへの投機的売買へ向っていたが、こうした状況のなかで船舶に投機資金が突然向けられていく。その間の事情を理解する上で8月31日の日記は極めて興味深い。

「金融の緩慢は其極度に達し、遊金の利用の法に腐心するも……銀行家は旧套を墨守するの外名案あるにあらざれば、本春来三回の預金引下を為し、定期は已に年4分なる最極度に達したるも、事業不振と地方不景気の為め遊金は益都会銀行の匣中に流入し、滔々として底止するところをしらず。日歩五六厘のコールを争ひ、八厘以下を以て紡績手形の割引を競うの有様にて、今や銀行は遊金の包囲攻撃に逢ひて圧倒せられんとするの窮状」にある。

これまでは日本の銀行は船舶関連の貸付には極めて保守的で、平生に言わせると、全くの「旧思想」（7月26日）に捕らわれていた。三菱銀行、住友銀行、三井銀行など一流銀行は軒並み船舶金融に背を向けていた。その融資態度が突然変化し始める。

「遊金に苦める結果は銀行をして船舶に貸出を為さしむるに至れり。船舶を以て最も危険なる投資物件として絶対に忌避せる彼らは、今や遊金の圧迫と海運業の旺盛に幻惑して、船舶がファンシー・プライスで以て経験ある船主の手を離れて素人船主の手に移りつつある現象を悟了せず。現在の市価を標準としチャーター高率を目的として多額の貸出を為すに

至り、益船価を昂騰せしめ、楽観家をして、百年乃至二百年の後に再来するやの疑あるこの大戦乱の結果として顕われたるこの大暴騰を、普通の市価と思はしむに至れり。保険者として我輩等は大いに前途を警戒せざる可からず。若し不測の出来事生じて海運界に大変動を生じ、チャーターの暴落に船価の低下を以てせば、経験なき船主は我先にこの災厄を免れんとして益其運賃及船価を低落せしむるに至らん。此時に於て暴富を夢想しつつありし素人船主は大損失を被むるに至らん。而してこの大損失より僥倖にも脱するを得んには、其船舶が不幸にして全損に帰したる時の外、他の手段なからん」(1915年8月31日)。

つまり平生によると、全般的事業不振と地方景気の不信とで都会の大銀行に資金が集中していったが、しかしその融資先がない。どの銀行もこれまで船舶にはリスクが大きいとして貸付対象からはずしていたが、中国への二個師団派遣を期に海運業界が活況を呈し始め、この状況に「旧思想」の銀行もついに貸し出しをするようになる。資金供給源がこうして開放されると、海運業界は一層「旺盛」となり、船舶価格も異常な昂騰を呈するようになる。「素人船主」による投機とそれにつぎ込まれる銀行資金とによってますます投機的性格を帯び始める。平生はこの状況を「大いに前途を警戒」と冷静に見ていた。この百年、二百年に一度あるかないかの大戦争の中でのこうした「大暴騰」から「船成金」が登場することになる。

成金とは「戦争が生じたる一種の気分」であると平生夙三郎は日記に書き付けている。「殊に神戸の如き」は日本の主たる貿易港であり、造船の盛んな土地柄で、船成金の「発生最も多き地」である(1918年1月28日)。平生は、船成金は大概非常に強く「物欲」に執着する人々であると見なしていた。例えば山下汽船創業者の山下亀三郎について、「彼の人格は到底社会の上位に座すべきにあらざるも、金権万能の如く見ゆる現代に於て、彼は金銭を以て自己の地位を昂上せんと腐心せんとしつつあるも、……如此くして名を得

んとするは痴呆の至」(1917年12月7日)だと痛烈に批判している。

日記には船成金の話は1915年10月18日に夜行で上京の途次、寝台列車で片岡直温らと同室になり、彼らとの談論の中で「談は海運界の旺盛、船成金の發生に及び」と出てくる。その例として東海汽船の社長で、第一次大戦後に浅野財閥の創設者となる浅野総一郎の話も出てくる。

このように船舶が投機の対象となり、船成金が巷の話題となってくると、すでに海運界は完全にバブルと化していた。これは日本だけではなくて世界的に見られた現象で、例えばイギリスにおいては軍が「商船徴兵令」を発し、造船資材が不足するとともに輸入途絶の状況になると傭船料は昂騰し、船価は天井知らずとなり、売買契約すら守られなくなった。日本では如何なる状況を呈していたのか。1915年11月23日の日記には以下の記述が見られる。

「最近川崎造船所に於て製造せる仕入船(注文ではなく、見込み生産で建造された船……藤本)福德丸(重量トン2600トン)が競売の結果46万5千円で売却されたるが如き、実に驚くべき価格にして、如此き高価なる小船を以て買主は如何なる航路、如何なる用途に向けんとするや。実に怪訝に堪えず。……少しく資金を有し且船舶に志ある者は船舶を購入せんとし、唯チャーターレージ(傭船料……藤本)を以て標準として、船舶の種類、速力、石炭の消費、荷揚荷下の便否、船齡の老若、船体機関の衰弱程度を講究調査することなく、単に重量屯の大小に依りて価格を上下するが如き形勢にして、寧ろ狂気の沙汰というべし。如此き新船主は……唯運を天に任して投機をなす無学無識なる相庭師と一般なり。実に危険といはざるべからず」。

このようにバブル状態になると資金供給源の銀行家たちも何もできず、あるいは、古今東西普遍的に見られるのだが、バブルに彼らは却って煽られる。上記に続けて平生は次のように記している。

「今や資金の横溢は其勢を改めず、資金流通の衝に当れる銀行者或資金

運用の局に在る企業家も、開闢以来、日本の経済に於て未曾有の資金豊富を如何ともする能はず、之を調節運用して経済界の発展に資する能はず。……株式市場の殷賑は日々其盛を加え、……諸株一勢に昂上し所謂強気万能の光景なり」。

上記の日記の叙述は11月23日のことだが、このように株式取引所では相場がますます強気となり旺盛となっていたが、実体経済はどうであったのだろうか。その2～3週間ほど前、11月5日に次のような話題が記されている。この日、長女志津子のある学友が平生を訪ねて来て、彼女の許婚が今年京大法科を卒業して就職先を求めたが、雇ってくれる企業はないので途方にくれている、どこか斡旋してくれないだろうか、と来訪の用向きを告げた。平生は許婚のために「就職先を探しつつある若き夫人」を見て驚いているが、これに続けて「法学士の売口が如何に困難にして高等遊民が年々多数に輩出することを国家経済のために歎ぜざるを得ず」と書き記している。

不況下の異常な株式取引所の活況は第一次大戦下の日本経済がいかに構造的に歪なものであったかを類推させるが、<sup>(10)</sup> 実業家たちのモラル・ハザードについても平生は強い懸念を抱くようになる。特に株式市場で人気の船舶業界にそれが見られた。船舶と株式で百万円儲けた、平生も親しくしていた榎本

---

(10) 石橋湛山は戦時下の金融緩慢と株式投機の関係について以下のように論じた。日本はアメリカとともに貿易出超の結果正貨が流入し資金が潤沢になり、金利低下が生じているが、企業はそれに対応して新規事業を行っていない。それは世界の生産が「戦争需要の為に吸い取られ、生産設備の拡張に振向け得る余力は極めて乏しい」からである。公衆の資金は行き場を求めて株や土地に向かうが、そこには「真に資金の需要の増加」は生じてこない。というのは、「買手の資金が売手の資金に転じ、買手の預金が売手の預金に振替る迄で、金融市場から見れば全体の預金に些かの増減も起こさぬ」からである。したがって如何に投機が盛んに行われても「金融金利に格別の差し響き」を生じていないのである（石橋湛山「第一次大戦に処する産業・経済政策」『石橋湛山全集 第2巻』東洋経済新報社、1971年、254-245ページ）。

この石橋の大戦下の投機に対する理解と平生の理解とは良く似ているが、1915年12月25日の日記でも平生は投機が何等生産的ではないと記している。

謙七郎に12月25日にパーティーの招待を受けて出かけているが、その感想を次のように記している。

この「破天荒」の「盛宴」に、

「心中寧ろ不快に感ぜり。彼が勝ち得たる百万金は一部は同氏が海運の盛況に先んじて炯眼其前途を達観して獲得したるものにして正当の利益なりといえども、其一部は彼が二回も売買契約を破棄し、唯契約上の文句を楯に取りて買主を恐喝して（徳義上）得たるものにして、大部分は株式相庭に於て獲得せしものなり。株式相庭に於ては一の利は他の損にして、この取引に依りて何らの生産なし」。

船舶売買の不徳義と株式取引所景気はいずれにしても実体を欠くものであり、そこからの儲けは他人を欺くことの上に成り立っている。事実船舶売買をめぐる平生はある係争に関わって不愉快な思いをしている。それは函館の濱根岸太郎と中村準策との間に交わされた汽船不動丸の売買契約に関する紛争で、その要点は、中村が13万円で不動丸を濱根に売渡すことになり、売買成立時に4万円濱根が支払い、以後2千円づつ月賦払いで、11月末には1万円支払い、来年3月末には完済し、その時点で名義変更の手続きをするというもので、本船はすでに濱根が引取り運行されている。ところが濱根が1万円の支払いを「看却」したことで、中村はこの「過失」を利用して売買契約の解除を催促し、あわせて既に濱根が払い込んだ6万8千円を没収し、本船をこの12月31日までに引き渡すように要求してきている。濱根はこれに驚き急遽神戸にやってきて1万円の支払いをして中村からの通告を撤回するように申し入れたが、中村はこれを拒絶したため、濱根は窮して平生を訪ね、意見を求めた。

これに対して平生は次のように考えた。中村は濱根の些細な「失念」を利用して既に払い込んだ6万8千円と「船価騰貴に依り生じたる拾有余万の利潤」を獲得しようとしたもので、極めて「悪辣なる手段」で「一驚の外」な

し。公正証書には契約条項に違反した場合にはただちに契約を解除するとあるが、何の督促もなく契約を解除するというのは「商業道徳上看過すべからざる不徳行為といはざる可からず」。

平生は以上のように述べて、以下のように続ける。

「近来、船主等が唯利得の爲めに眼眩み徳義を無視し法理を蔑視して三百（代言……藤本）的行為を以て善良なる相手方を恐喝して不義を貪らんとするもの類々たるは実に慨嘆に堪えざるところなり。……中村氏は高商出身にて海運業に従事して成功せる一人なるが、その手段が冷酷なりとて世の悪評を招くこと多き……。同氏は昨年来、所有船を低率を以てチャーターし、不動丸も亦本春、船価暴騰せざる前、売却せしを以て他の成金連中の如く巨利を博する能はざりしを以て大に煩悶せるが如く、其結果は如此き不徳なる手段を以て一旦売却せし船舶を取戻さんとせしものなるべく、実に同氏の如きは余の所謂金銭に中毒せる病的貨殖家の一たるを失はず」（1915年12月26日）。

このように株式取引所と海運業界では金に目がくらみ商業道徳を欠くことが横行してくると人心までも荒廃し、人の道に悖る行為が増えてくる。「金銭を得ん爲めには妻子、家庭、親族、友人、知己、位地、志操の一切を棄つること」（11月23日）を何とも思わぬ輩が増大する。11月23日の夜、平生が大阪梅田で目撃したのは新嘗祭で始まった「カーニバル式行列及踊舞台」が変じて「風俗壊乱の仮装踊」となり、「良家の子女」までも熱狂し、「幾多不倫の行為」が行われ、「低級待合を満たすの現況」など、「実に眉を潜むべきものなり」。この風俗紊乱は東京でも発生していた。平生の友人の話によれば、11月16日に芸妓の手古舞（江戸中期頃から男性風の扮装で芸者が山車や御輿を先導して木遣りを歌って練り歩いた）が宮城前に行こうとして馬場先門前に来たとき、群衆がそれを取り囲み、そのうち彼女らは「色魔の載るままに放任」され、一人の芸妓は二日後に息を引き取ったとのことであった。

平生はこれを聞いて、「如此き醜穢なる惨事が宮城の前に実顕せられたること、実に御一代の恨事にして、彼らは実に不忠不義の徒、之を八裂にするもあきたらず」と怒っている（11月29日）。後日、大正天皇が教育について「御沙汰書」を出す、それは「去る16日の祝賀会に際し二重橋外の広場に於て芸妓の行列を乱し、彼等に対して筆にすべからざる醜態悪戯を為したるものは、無智の労働者にあらずして教育ありし学生」であったという事実から推して、現在の教育が「人格の修養、人物の陶冶」を蔑ろにしている、「勅語の精神に背戻すること大」であることを「陛下に於て了知」せしめているからではないか（12月11日）と推察する。

さらにこの11月29日の日記には、23日の大阪での熱狂的仮装踊りで質屋が「時ならぬ繁昌」し、「此勢に於て無事に越年を為すこと困難なる徒は続出すべき」を警察なども警戒していること、そしてまた他方で「株式の奔騰は実に凄じ」く、また輸出超過と船運賃上昇で正貨が増加し、日本郵船などは一割の通常配当に加えて5分の特別配当を行うとの発表で、「恰も黄金の雨が下れるの感を生じ、諸株一勢に高潮を呈し、其勢実に猖獗なり」と記されている。12月1日には大阪株取引所は「不穩の光景」を呈するにまでに至る。

日本の戦争景気は株価と船舶・運賃の値上がりでいよいよ加熱し、他方で一般国民の浮かれた気分は「風俗壊乱」の様相をますます高めていった。